

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報 告 書

プログラム名	音楽・演劇表現の基礎行動によるコミュニケーション・スキル向上のための研修モデルカリキュラム開発プログラム
プログラムの特徴	音楽や演劇の表現行動の基層にある一般的で汎用的な技能を応用した、教師と児童・生徒、教師と教師及び教師と父母の双方向的コミュニケーション力と人間関係を向上させるための教員研修モデルの教材開発

平成 22 年 3 月 31 日

琉球大学 沖縄県立総合教育センター

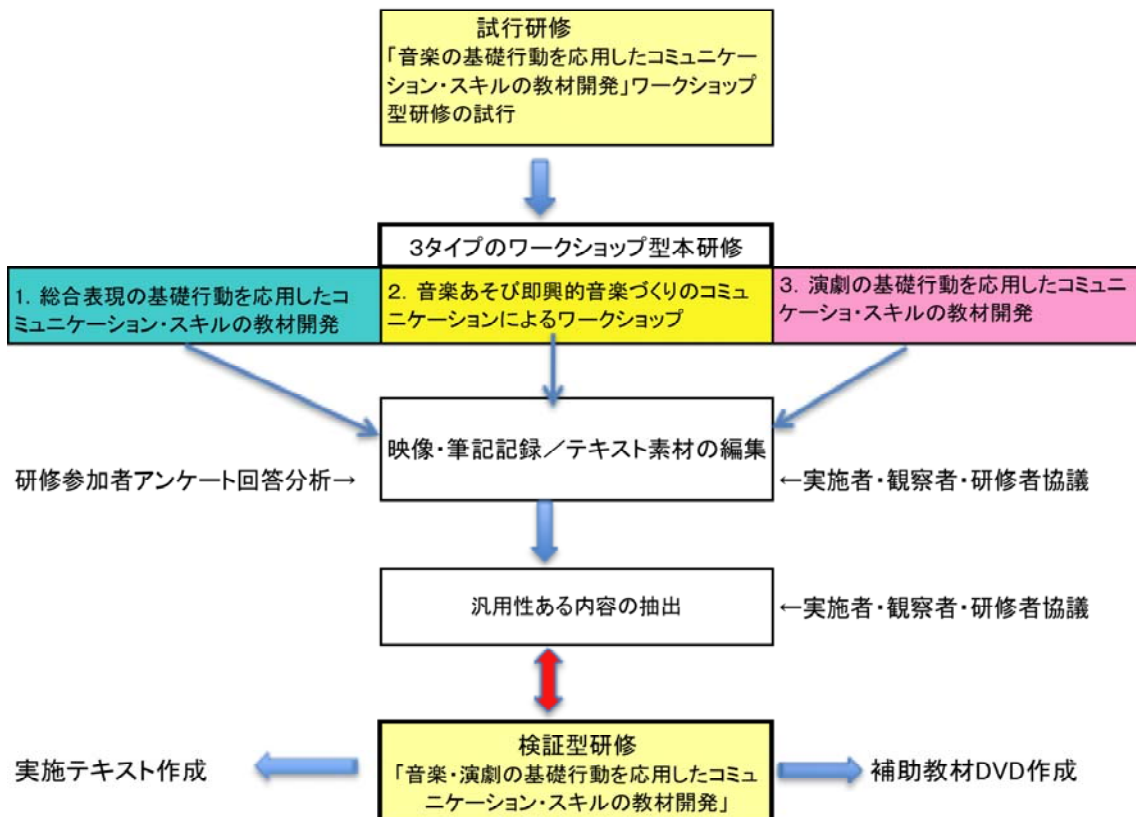
## プログラムの全体概要

教員には、児童生徒の学習意欲を引き出すための授業技術と、児童生徒間の双方向的な対話を通して学習行動を展開する授業力が必要である。その一つに、教師対子ども、子ども対子どもの円滑なコミュニケーションによる学習行動の演出力と、柔軟な人間関係を不断に創出していく発想・技術とがある。

本プログラムでは、教員の教育活動における諸行動のなかで、とくに多様なコミュニケーション活動の方法に焦点をあて、その発想・技術を中心にした研修プログラムを開発した。ことばや文字を中心とした情報の伝達だけではなく、見る、聞く、語る、触れあうという身の関係行動のワークショップを具体的に設計し、集団学習における多様なコミュニケーション能力とその技法のあり方を提示した。

プログラム開発にあたっては、校種別によらない教員を対象として、① 試行型研修-講義とワークショップ試行-の実施（2回）、② 領域の異なる招聘講師によるワークショップ型本研修の実施（3回）、③ 本研修の分析と抽出にもとづく検証型研修（1回）を実施し、そのすべての研修に、沖縄県立総合研修センター指導主事、小・中学校教員が観察参加し、研修終了ごとに研修参加者との協議及びアンケート回答の分析を行い、研修内容の妥当性を検討したうえで必要な修正を行った。

以上の検討・修正にもとづいて、ワークショップの内容から教員研修として汎用性のあるもの、及び指導的教員が実施可能なものを抽出してテキストを作成した。なお、中心となったワークショップの記録映像からは、ワークショップ展開のイメージが得られるように、短時間に編集したDVD 補助教材も作成した。



## I 開発の目的・方法・組織

### 1. 開発の目的

今日、学校や家庭では子どもたちの没個性的な表現行動、対人関係の不安定行動が指摘されている。学校内では、教師相互のコミュニケーション不足からくる教師集団の共同性が希薄になってきたとも言われる。また、教師と保護者をふくむ地域社会との円滑なコミュニケーション構築も今日の学校課題となっている。

本プログラムは、こうした課題意識に立って、教師のコミュニケーション・スキル向上のための研修モデルカリキュラムの開発を目的とする。開発する研修モデルの目標は、受講者が①教員のコミュニケーション・スキル向上による授業力向上、②教員と子どもとの対話力・親和性の向上、③学校内における教員相互の協働力向上、④父母・地域との関係構築力の向上、を「期待される開発成果」として設定する。

### 2. 開発の方法

本プログラムは、一方向的な情報伝達型研修やディベート方式の研修ではなく、研修者と被研修者とが双方向的にカリキュラムを学習展開する「ワークショップ型研修」を想定して開発された。ワークショップとは、ある目的のために用意された共同行動・作業の場と時間を意味し、参加する人々の主体的な発想や行動を、共同・協働によって展開する方法である。その結果、多様な価値観を認め合いながら、そのなかで、参加者個々に独自の価値観を保証しつつ、コミュニケーションの多様なありかたを獲得する研修とした。

その理由は、学習場面でのコミュニケーション行動が、学習の主体性、対話性、共感、想像・創造性、多様な発想と思考といったことがらを実現することにある。そのためには、まさしくそのような方法において研修者・被研修者共同で実践され、身をもって感得されることによって研修効果を発揮する。従って、研修を主宰する講師は、教えるというスタンスではなく、支援者または援助者（ファシリテーター）というスタンスに立つことになる。

主体性、対話性、共感、想像・創造性、多様な発想と思考という、重層的な表現と関係行動を獲得する題材として、音楽や演劇の表現行動の基層にあるコミュニケーション・ツールの技法、すなわちパフォーマンス行動に内在する協働性、対話性、創造性に着眼してこれを用い、その汎用性と一般性を探ることとした。

演劇行動では、身体の表現行動を通じたイメージの交換と共有、対話やことばの共有による双方向コミュニケーションのあり方がポイントとなった。音楽行動では、音を生み出す身体行動の関係、生み出された音から他者と共鳴することによって、共感に満ちたコミュニティ（共同体）を形成していくことが確認された。

開発過程の詳細は、以下2.1～2.3である。

#### 2.1 試行研修1：音楽の基礎行動を応用したコミュニケーション・スキルの教材開発

－ ワークショップ型研修の実施（小学校教員対象）－

#### 試行研修2：音楽の基礎行動を応用したコミュニケーション・スキルの教材開発

－ ワークショップ型研修の実施（中学校教員対象）－

## 2.2 ワークショップ型本研修

本研修1：総合表現の基礎行動を応用したコミュニケーション・スキルの教材開発

－ワークショップ『響き会う声と身体』－

本研修2：音楽あそびと即興的音楽づくりによるワークショップ

－ワークショップ『音遊び、音楽づくりワークショップ』－

本研修3：演劇の基礎行動を応用したコミュニケーション・スキルの教材開発

－ワークショップ『ムービング・パペット』－

## 2.3 検証型研修：2.1 試行研修、2.2ワークショップ型研修の分析と抽出にもとづく、汎用型研修

－音楽・演劇の基礎行動及び総合表現によるコミュニケーション・スキル向上研修－

なお、実施された各研修の評価は、いずれも①研修参加者による研修自己評価（リフレクション）②研修参加者へのアンケート調査と同調査への講師・観察者の共同分析、①②に基づいて本プロジェクトに適合しかつ汎用性のあるものを再構成し、検証型研修として実施した。

## 3. 開発組織

開発組織は、琉球大学教育学部音楽教育教室・心理臨床学科教員、沖縄県立総合教育センター指導主事、研修外部講師、市町村立小・中学校教員によって構成された。

組織内の役割分担は、表1のとおりである。

表1 開発組織と担当・役割

No.	所属	担当	役割
1	琉球大学教育学部	・研修カリキュラム開発 ・研修実施 ・研修観察・評価 ・資料作成 ・映像記録と編集 ・テキスト作成 ・報告書作成	統括
2	沖縄県立総合教育センター	・研修記録 ・研修観察評価 ・アンケート分析 ・報告書作成	副統括
3	特別講師(演出家)	・研修カリキュラム開発 ・研修実施	招聘講師
4	特別講師(音楽教育研究者)	・研修カリキュラム開発 ・研修実施 ・テキスト作成	招聘講師
5	小・中学校教員	・研修参加 ・研修観察評価	

## II 開発の実際とその成果

### 1. 研修の背景やねらい

本報告書の I.目的欄に記述したとおり、学校や家庭は、子どもたちの没個性的な表現行動や対人関係の不安定行動、教師相互のコミュニケーション不足からくる教師集団の共同性の希薄化、教師と地域社会との円滑なコミュニケーション構築等の課題がある。

そこで、本プログラムの目標を、下記1)～4)で示した「期待される開発成果」として設定し、教員を対象に教員のコミュニケーション・スキル向上を図る研修モデルの開発を行うこととした。

「期待される開発成果」

- 1) 教員のコミュニケーション・スキル向上による授業力向上
- 2) 教員と子どもとの対話力・親和性の向上
- 3) 学校内における教員相互の協働力向上
- 4) 父母・地域との関係構築力の向上

教師のコミュニケーション・スキル向上の研修モデルを模索する中で、音楽・演劇の表現活動が特性としてその向上に有効性を持っていると捉え、ワークショップとしてカリキュラム化することでその活用が可能ではないかと考えてプログラム設計に至っている背景がある。

これまでに、ワークショップ型本研修における参加者のアンケート分析を行ってきた結果、それぞれの考察において、参加者が音楽・演劇の表現活動がコミュニケーション・スキルの向上に有効であると評価する姿が読み取れた。

これは、音楽・演劇表現の基礎行動によってコミュニケーション・スキルの向上を図ろうとする本プログラムの方針を裏付けるものであり、また実際にカリキュラムとして構成、提供していく際の大きな手がかりになったと言えるだろう。

### 2. 対象、人数、期間、会場、日程、講師

モデル研修を開発するにあたり行った研修は、いずれも教員を対象として沖縄県各地の研修施設・学校等を会場に実施した。その経過は以下1)～3)である。

- 1) 試行研修：音楽の基礎行動を応用したコミュニケーション・スキルの教材開発を仮説化し、小学校教員と中・高等学校教員それぞれに、試行的なワークショップ型研修を行った。
- 2) 本研修：試行研修受講生の評価、及び第三者の観察と分析を経て、それぞれ方法論の異なる研修を企画し、特別講師に依頼して本研修を実施した。
- 3) 検証研修：本研修の受講生に対して、その研修直後にリフレクション及びアンケート調査を行い、その分析にもとづいて、とくにコミュニケーション能力の向上に汎用性のある内容に絞り込み、検証型の研修を実施した。

研修の対象、人数、期間、会場、日程、講師は表2のとおりである。

表2. 研修対象、人数、会場、日程、講師一覧

研修名	対象	人数	期間	会場	日程	講師
試行研修1. 音楽の基礎行動を応用したコミュニケーション・スキルの教材開発	小学校 教員	19名	平成21年 7月24日	沖縄県立総合教 育センター	9:00-12:00 13:00-16:00	中村 透 玉城 美智子
試行研修2. 音楽の基礎行動を応用したコミュニケーション・スキルの教材開発	中・高等学 校教員	18名	平成21年 7月31日	沖縄県立総合教 育センター	9:00-12:00 13:00-16:00	中村 透 玉城 美智子
本研修1. 総合表現の基礎行動を 応用したコミュニケーション・スキルの 教材開発(ワークショップ『響き会 う声と身体』)	小・中学校 教員	16名	平成21年 7月29日	沖縄県立八重山 高等学校	9:30-12:00 13:30-17:00	中村 透
本研修2. 音楽あそびと即興的音楽 づくりによるワークショップ(『音遊 び、音楽づくりワークショップ』)	小・中学校 教員	39名	平成21年 8月6日	南城市 文化センター	10:00-12:00 13:00-16:00	牧野 淳子
本研修3. 演劇・美術の基礎行動を 応用したコミュニケーション・スキルの 教材開発(ワークショップ『ムー ヴィングパペット』)	小・中学校 教員	16名	平成21年 8月10日	浦添市立中央公 民館分館	10:00-12:00 13:00-16:00	佐藤 信
検証研修: 音楽・演劇・総合表現の 基礎行動によるコミュニケーション・ スキル向上研修	小・中学校 教員	14名	平成21年 12月5日	琉球大学教育学 部附属小学校	13:00-16:00	中村 透 津田正之 玉城美智子

### 3. 各研修項目の配置の考え方 (なにをどの程度配置すべきと考えたか)

各研修項目は、音楽、演劇、総合表現の基礎行動としてのコミュニケーション的  
活動内容を抽出し、各領域を専門にする講師によるワークショップをベースにして配  
置した。また、ワークショップとは、本来「講義など一方的な知識伝達のスタイルで  
なく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学び  
と創造のスタイル」(中野:2009)である。したがって、参加者と講師との、柔軟で即  
時的な関係行動が研修内容を実態化していった側面もある。

これらのことから、実際にカリキュラムとして構成する際の枠組みとして、活動内  
容の整合性を計った形で、半日、1日、2日といった時間制でのカリキュラムを提案  
することとした。カリキュラムを構成するために、まず三つのワークショップを振  
り返り、活動内容の項目を研修プログラムの目標に対応させて分類を試みた<sup>1</sup>。その  
うえで、汎用性、一般性のあるものを抽出した活動項目を実施型研修のモデルとし  
て(4)に整理した。

なお、表中の「対応するワークショップ領域」「ワークショップ項目」「ワークシ  
ョップ内容」「テキスト番号」は、いずれも別冊資料の『音楽・演劇表現の基礎行動  
によるコミュニケーション・スキル向上のための研修教材集』の分類による。

<sup>1</sup> 各ワークの内容を本研修のプログラム目標に分類したものは、本報告書執筆者中村の判断によるもので、  
ワークショップ実施者に依るものではない。

表3 本研修1. 総合表現の基礎行動を応用したコミュニケーション・スキルの教材開発  
 -ワークショップ『響き会う声と身体』中村 2009 より-

本研修プログラムの目標	対応するワークショップ領域	ワークショップ項目	ワークショップ内容	テキスト番号
1)コミュニケーション・スキル獲得による授業力の向上	ことばと身体による即興のコミュニケーション遊び	・対人関係から集団共同へ	・同時自己紹介 ・ことばのシェアリング	N3. N4.
2)教師と子ども、子ども同士の対話力、親和性の向上	ことばと身体による即興のコミュニケーション遊び	・対人関係から集団共同へ ・コミュニティづくり ・身の関係と想像	・離合と集散 ・ハンド・シグナル ・ことばのシェアリング	N1. N2. N4.
	見る／見られるによる即興のコミュニケーション遊び	・身の関係と想像	・ミラー・ゲーム	N5
3)子どもの表現力、受信力の向上	ことばと身体による即興のコミュニケーション遊び	・対人関係から集団共同へ	・同時自己紹介 ・ことばのシェアリング	N3. N4.
	見る／見られるによる即興のコミュニケーション遊び	・身の関係と想像	・身体造形とシャッターチャンス	N5.
	声と身体と音具(楽器等)による即興的集団表現	・音楽即興によるコミュニケーション活動	・声とことばの即興アンサンブル ・サウンドを聴く／ブラインド・リスナー	N7. N8.
4)学校内における教員相互の協働力向 5)父母、市域市民とのコミュニケーション・スキルと対人関係、人間関係性の向上	ことばと身体による即興のコミュニケーション遊び	・コミュニティづくり ・身の関係と想像	・離合と集散 ・身体造形とシャッターチャンス	N1. N6
	見る／見られるによる即興のコミュニケーション遊び	・身の関係と想像	・身体造形とシャッターチャンス	N5.
	声と身体と音具(楽器等)による即興的集団表現	・音楽即興によるコミュニケーション	・声とことばの即興アンサンブル ・サウンドを聴く／ブラインド・リスナー ・グループで即興の音楽づくり	N7. N8. N9.

表4 本研修2. 音楽あそびと即興的音楽づくりによるワークショップを応用したワークショップ  
 -『音遊び、音楽づくりワークショップ』 牧野2009より-

本研修プログラムの目標	対応するワークショップ領域	ワークショップ項目	ワークショップ内容	テキスト番号
2)教師と子ども、子ども同士の対話力、親和性の向上	音あそび・音楽ゲーム	・ペアをみつつけよう	・歩く、仲間に意識を向ける、テンポをつくる	M1
		・三角形でダンス	・まねる、仲間の動きを察知、2・3・4拍子を体感する、与えられた拍子で身体表現しながら進む	M4
3)子どもの表現力、受信力の向上	音あそび・音楽ゲーム	・パースデーゲーム	・手拍子などのボディーサウンドによって、リズムパターンの偶然の重なりを聴き、楽しむ。拍に乗って、異なったリズムパターンを互いに重ねる	M2
4)学校内における教員相互の協働力向 5)父母、市域市民とのコミュニケーション・スキルと対人関係、人間関係性の向上	音あそび・音楽ゲーム	・変拍子ゲーム	・拍を打つ、仲間とタッチ、変拍子を体感する	M3
		・間(休符)を埋めよう	・流れを共有する、集中して聴く、相手の動きに集中し、互いに補完しあう	M5
		・ずらして重ねよう	・拍の流れに乗る、追いかけ、追いかけるという関係性を体感、拍をずらして重ねる	M6

表5 本研修3. 演劇の基礎行動を応用したコミュニケーション・スキルの教材開発

—「ムービング・パペット」佐藤 2009 より—

本研修プログラムの目標	対応するワークショップ領域	ワークショップ項目	ワークショップ内容	テキスト番号
1)コミュニケーション・スキル獲得による授業力の向上	ことばと身体による即興のコミュニケーション遊び	・対人関係から集団共同へ	・同時自己紹介 ・ことばのシェアリング	N3. N4.
2)教師と子ども、子ども同士の対話力、親和性の向上	ことばと身体による即興のコミュニケーション遊び	・対人関係から集団共同へ ・コミュニティづくり ・身の関係と想像	・離合と集散 ・ハンド・シグナル ・ことばのシェアリング	N1. N2. N4.
	見る／見られるによる即興のコミュニケーション遊び	・身の関係と想像	・ミラー・ゲーム	N5
3)子どもの表現力、受信力の向上	ことばと身体による即興のコミュニケーション遊び	・対人関係から集団共同へ	・同時自己紹介 ・ことばのシェアリング	N3. N4.
	見る／見られるによる即興のコミュニケーション遊び	・身の関係と想像	・身体造形とシャッターチャンス	N5.
	声と身体と音具(楽器等)による即興的集団表現	・音楽即興によるコミュニケーション活動	・声とことばの即興アンサンブル ・サウンドを聴く／ブラインド・リスナー	N7. N8.
4)学校内における教員相互の協働力向 5)父母、市域市民とのコミュニケーション・スキルと対人関係、人間関係性の向上	ことばと身体による即興のコミュニケーション遊び	・コミュニティづくり ・身の関係と想像	・離合と集散 ・身体造形とシャッターチャンス	N1. N6
	見る／見られるによる即興のコミュニケーション遊び	・身の関係と想像	・身体造形とシャッターチャンス	N5.
	声と身体と音具(楽器等)による即興的集団表現	・音楽即興によるコミュニケーション	・声とことばの即興アンサンブル ・サウンドを聴く／ブラインド・リスナー ・グループで即興の音楽づくり	N7. N8. N9.

#### 4. 各研修項目の内容、実施形態（講義、演習、協議等）、時間数、使用教材、進め方

小学校、中学校、高等学校教員を対象とし、これらの異校種教員が混在していて良い。研修クラスの人数は、30～40人だが、より少人数でも実施可能である。ワークショップ型研修の特性上、演習を中心に展開するが、各ワークショップが終了したあとに、研修者（ファシリテーター）が進行役となって、参加者全体の省察と評価（エバリュエーション）を協議の形式で行うのが望ましい。

省察と評価にあたっては、ワークショップを体験しての率直な感覚を尊重しつつ、参加者の多様な価値観を認め合う雰囲気づくりが大事である。

教材は、本プロジェクト作成の『音楽・演劇表現の基礎行動によるコミュニケーション・スキル向上のための研修教材集』を参考にし、また、研修者自身が同教材から着想を得て独自のアイデアを構想することも期待したい。必要な教具はワークショップの項目に応じて異なるので、同テキストを参照されたい。

以下に、1) 2日研修のためのカリキュラム・モデル、2) 1日研修のためのカリキュラム・モデル、3) 半日研修のためのカリキュラム・モデルを例として示す。



1) 2日研修のためのカリキュラム・モデル

第1日目午前(3時間)				
研修項目	実施形態	時間数	使用教材	進め方
1. ワークショップへの導入	演習と講義	30分	テキスト S1-S2	・準備のストレッチ、WSへの期待を記入し、貼り付ける。ワークショップとは
2. 教師と子ども、子ども同士の対話力、親和性の向上	演習と協議	2時間	テキスト M1,N1,N2, N4,S5,N5,	・対人関係から集団共同へ → コミュニティづくり → フルーツバスケット → 身の関係と想像のワークショップへと連続する
	協議	30分		上記ワークショップの省察と評価
		3時間		
第1日目午後(4時間)				
3. 子どもの表現力、受信力の向上	演習	30分	テキスト N3,N4,N5	・同時自己紹介 → ことばのシェアリング → 身体造形とシャッターチャンス of ワークショップを連続する
	演習	1時間	テキスト N4,N5,S4	・聖徳太子 → ことばのシェアリング → 身体造形とシャッターチャンス of ワークショップを連続する
	協議と講義	30		上記ワークショップの省察と評価
	演習	1時間	テキスト N7,M2	・サウンドを聴く / ブラインド・リスナー → 手拍子などのボディーサウンド
	協議と講義	30分		上記ワークショップの省察と評価
		4時間		
第2日目 (午前3時間)				
3. 子どもの表現力、受信力の向上	演習	2時間	テキスト N8	声とことばの即興アンサンブル
	協議と講義	1時間		上記ワークショップの省察と評価
		3時間		
第2日(午後4時間)				
4. 学校内における教員相互の協働力向 5 父母、市域市民とのコミュニケーション・スキルと対人関係、人間関係性の向上	演習	3時間	テキスト S6a,6b,6c	・絵地図づくり → 組み立て → 物語づくり → ムービング・パペット → 発表
	協議と講義	1時間		上記ワークショップ及び全体の省察と評価
		4時間		

## 2) 1日研修のためのカリキュラム・モデル

午 前 (3時間)				
研修項目	実施形態	時間数	使用教材	進め方
1. ワークショップへの導入	演習と講義	30分	テキスト S1-S2	・準備のストレッチ、WSへの期待を記入し、貼り付ける。ワークショップとは
2. 教師と子ども、子ども同士の対話力、親和性の向上	演習	1時間	テキスト N4,N5,S4	・聖徳太子→ことばのシェアリング→身体造形とシャッターチャンスワークショップを連続する
	演習	1時間	テキストN7	・サウンドを聴く/ブラインド・リスナー
	協議	30分		上記ワークショップの省察と評価
		3時間		
午 後 (4時間)				
3. 子どもの表現力、受信力の向上 4. 学校内における教員相互の協働力向 5. 父母、市域市民とのコミュニケーション・スキルと対人関係、人間関係性の向上	演習	3時間	テキスト S6a,6b,6c	・絵地図づくり→組み立て→物語づくり→ムービング・パペット→発表
	協議と講義	1時間		上記ワークショップの省察と評価
		4時間		

## 3) 半日研修のためのカリキュラム・モデル

半日(4時間)				
研修項目	実施形態	時間数	使用教材	進め方
1. ワークショップへの導入	演習と講義	15分	テキスト S1-S2	・準備のストレッチ、WSへの期待を記入し、貼り付ける。ワークショップとは
2. 教師と子ども、子ども同士の対話力、親和性の向上	演習と協議	1時間	テキスト M1,N1,N2, N4	・対人関係から集団共同へ→コミュニティづくり→フルーツバスケット→身の関係と想像のワークショップへと連続する
	協議	15分		上記ワークショップの省察と評価
3. 子どもの表現力、受信力の向上	演習	30分	テキスト N4,N5,S4	・聖徳太子→ことばのシェアリング→身体造形とシャッターチャンスワークショップを連続する
	協議と講義	30分		上記ワークショップの省察と評価
4. 学校内における教員相互の協働力向 5)父母、市域市民とのコミュニケーション・スキルと対人関係、人間関係性の向上	演習	1時間	テキスト N7,M2	・サウンドを聴く/ブラインド・リスナー→手拍子などのボディーサウンド
	協議と講義	30分		上記ワークショップの省察と評価
		4時間		

## 5. 実施上の留意事項

### 1) 研修会場

研修会場は、ワークショップの特性上、研修生が全体であるいはグループに分かれて身体表現行動、グループ討議などができるようなフラット型のスペースが必要である。広さは、参加人数にもよるが、通常の学校教室の2倍ほどの広さが必要である。

### 2) 研修講師と助手

実施にあたって、研修講師は進行と支援役のファシリテーターとして行動する。多様なグループ活動が同時的に展開するシーンもあるので、助手役を1〜2人置くことで、随時情報交換を行い全体の進行状況が把握できる。

グループ活動に際しては、各グループのリーダーを選出して、一定程度進行を委託する方法が効率的である。

### 3) 進行

ワークショップの項目内容によっては、研修生が熱中し、終息の難しくなる場合もある。個々の項目についてあらかじめ予定時間を宣言し、終わりが近づいたらそのことをコールする。

## 6. 研修の評価方法

本研修の評価は、研修生のワークショップによるコミュニケーション行動の自己変容への自覚的認識と、それにもとづく教育実践への応用力が対象となる。従って、定量評価ではなく、研修の時間軸に沿って研修生の行動変容を比較する定性的な自己評価 evaluation を評価軸にすることとなる。また、コミュニケーション学習そのものが、共同行動によって支えられているので、個人的な自己省察にとどめず、研修生の相互関係のなかで評価行動を行うこともポイントである。

研修講師は、研修生のこうした自己評価を受け止めつつ、その評価に課題があれば、ワークショップ展開そのものの問題点を発見して検証する。具体的には、研修開始時の研修生の期待値とコミュニケーション力の自己診断 (Evl. I)、ワークショップにおける活動項目毎のリフレクション・自己省察 (Evl. II)、研修全体が終わったからの自己変容への評価 (Evl. III) を行う。

さらに、講師は研修終了後の教育実践場面での応用力と、その効果についても追跡調査を行い、研修生へフィードバックしていくことで、評価価値を高められる。

以上一連の評価を、図示したものが図1、図2である。

図1 ワークショップ研修内、終了後の評価

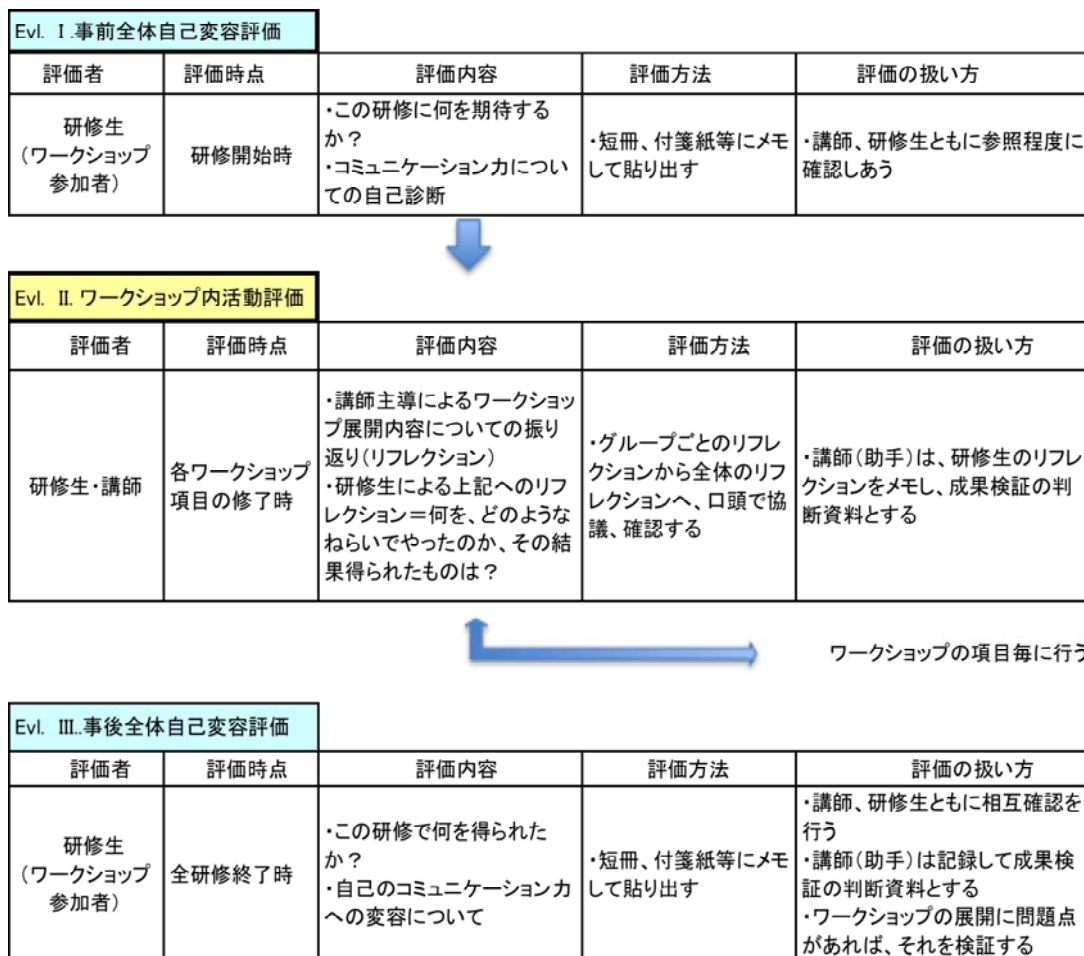
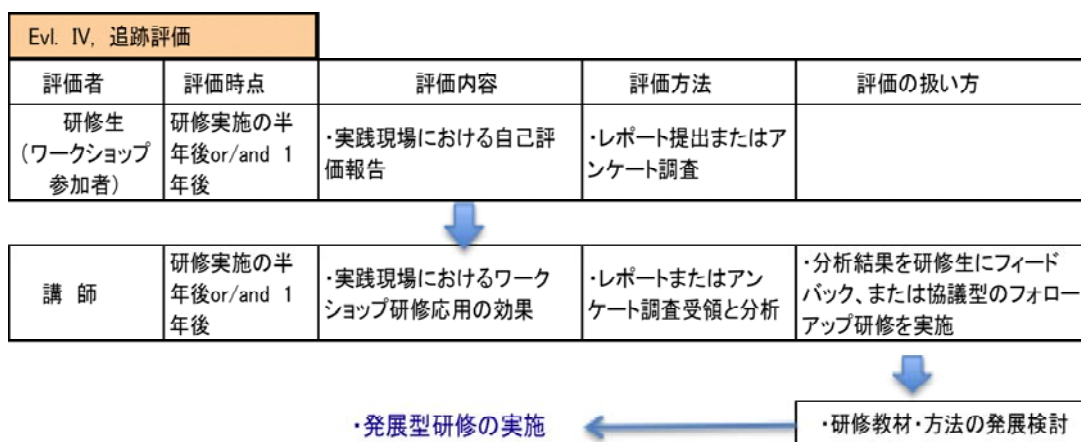


図2 ワークショップ研修後の実践を経た評価



## 7. 研修実施上の課題

研修実施上の第一の課題は、本研修の内容と実施方法が情報伝達型の研修ではなく、研修生の主体性・共同性に依拠したワークショップであることから、研修講師はワークショップの支援役として振るまうことを要請される点である。また、今日ワークショップ型の授業や研修が広く行われている実態があるので、こうした実践者をサポーターやアシスタントに招くことによって、よりスムーズな研修展開も期待できる。

第二の課題は、音楽・演劇の基礎行動を題材としている点にある。これについては、テキストにもあるように、音楽や演劇の専門技能を必要としないことに留意し、専門技能が必要という先入観や誤解によって研修やワークショップを行う際の妨げにならないよう十分配慮すべきであろう。研修全体については、とくに「コミュニケーション能力の向上」に焦点化されているが、ワークショップ後には、今日的教育課題、生徒指導、学級経営、学校経営、保護者との連携イベント等へ応用するアイデアを共有する方向で協議することが望ましい。

つまり、ワークショップで経験した諸活動を、子どもや親の側に置き換えて省察し、教育実践にどう生かしていくかの視点を交換し合うことが大事である。

## III 連携による研修についての考察

本研修プログラム開発は、琉球大学教育学部と沖縄県総合教育センターとの連携によって実施してきたが、その過程で全10回にわたる連携協議会がもたれた。この連携過程で得られた利点は、

- 1) コミュニケーション・スキルの向上という今日的な教育課題についての重要性の認識を共有するに至ったこと
- 2) そのための研修方法・内容、教材作成についての新しい方法論を共同で創出したこと
- 3) 学校種、教科の枠を超えた研修内容のあり方に対する方向性を得られたこと
- 4) 研修試行にあたって、学校教育以外の専門領域人材を招き、そのノウハウを教員研修のために応用開発できたこと
- 5) 大学と教育委員会が連携することで、大学の教員の専門性を活用し、より実践的な研修プログラムの開発に繋がったこと等である。

今後は、本研修プログラムを県・市町村教育委員会主催の各種研修会で、継続的に活用するとともに、その研修実績の理論的側面と実践的側面を往還させて深化させ、より多面的な内容に発展させていくことが課題である。

当面は、教育委員会・総合教育センターが行う新規採用初任者研修、教職5年経験者研修、教職10年経験者研修等の法定研修、あるいは長期休業期間に実施する教員研修への導入が考えられる。

なお、琉球大学教育学部では、「教員の資質向上方策の抜本的な見直しに係る提案募集について」（文部科学省）の協議を沖縄県教育委員会と平成22年3月に開始した。今後この協議は、両者合同の作業部会を設置して継続し、とくに現職教員の諸研修を、大学・教育委員会・総合教育センターとの連携ですすめる方向で検討する段階に入った。

## IV その他

### [キーワード]

コミュニケーション能力、ワークショップ型研修、自己表現、共同・集団学習、

### [人数規模]

30～40名規模

### [研修日数（回数）]

2日研修を基本とし、簡易型として1日研修、半日研修で行う。

なお、1日、半日研修の場合は、実質2日研修の内容をカバーできるように、2回（1日研修）、4回（半日研修）にわたって実施することが望ましい。

研修実施後、半年～1年以内に、フォローアップ研修を行う。

### 【問い合わせ先】

独立法人 国立琉球大学

教育学部 中村 透

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原一番地

TEL 098-895-8369 Fax.098-895-8316

沖縄県立総合教育センター

教科研修班 玉城 美智子

〒904-2174 沖縄県沖縄市字与儀587番地

TEL.098-933-7595 Fax.098-933-7562